

氏名	岡崎 いく子
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第2325号
学位授与の日付	平成14年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科産業社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	戦後台湾の日本語文芸研究－黄靈芝を中心として
論文審査委員	教授 佐藤 智水 教授 工藤 進思郎 教授 古川 隆夫 助教授 加治 敏之 福岡大学人文学部教授 山田 敬三 岡山大学名誉教授 石田 米子

学位論文内容の要旨

本論文は、台湾で戦後五十年以上にわたって今なお俳句・短歌・詩・小説・随筆・評論などを「日本語」で創作し続けている黄靈芝という特異な作家に焦点を当て、その作家像と作品について戦後の台湾社会や文化を背景に明らかにしつつ、台湾文芸史の中に位置づけることを試みたものである。A4版で187頁（1頁約1300字）に及ぶ。

序章 戦後台湾の日本語文芸概略

太平洋戦争後、1946年に国民政府が中国大陸から台湾へ撤退してくると、国語は日本語から北京官話に切り替えられた。この時点で表面上日本語は消え去ったが、戦後初期にはなお日本語による文芸作品を著わした作家が少なからずいた。本章では、その戦後初期の政治・社会状況の中で作られた日本語文芸の作家たちと作品について、文芸誌『新新』・『明台報』や日文紙『軍民導報』等の資料を発掘し、戦後台湾文芸史の上で果たした役割りを指摘しつつ、二・二八事件（1947年）が台湾文芸に与えた衝撃について言及した。

第一章 芸術家の誕生

本章では、黄靈芝（1928～）の生い立ちから、十七歳で終戦を迎え、戦後二十歳頃より日本語による創作を開始するまでを時代背景と関連させて叙述する。日本統治下の台南で屈指の本島人有力者黄欣の五男として生まれた黄は、戦後台湾社会の厳しい状況下、一族没落のなか、発表の場がないばかりか、弾圧の危険に身を晒しながら日本語による創作を目指す。その内面を探りつつ、その後の半世紀にわたる『黄靈芝作品集』の自費出版（現在十九巻）、彫塑の製作、古代玉器の収集と研究、日本俳句界との交流、『台湾歳時記』の執筆など、黄靈芝の多彩でたゆみない生き方の足跡をたどった。

第二章 死生観

本章では、小説「蟹」「古稀」「癌」「法」「夢」「罪」「毒」の七篇を通して黄靈芝のなかに潜む死生観を探る。黄靈芝は若くして不治の病を患い、生きていくことに積極的

価値を見いださず、治療を放棄して山に入り果樹を栽培し、豚を飼い、読まれる当てのない日本語作品を黙々と生み続けてきた。そこから、戦前戦中の日本支配時代も、戦後の台湾社会も、統治者の下で弄ばれる運命に甘んじた台湾知識人に共通する無力観・空虚感、そしてささやかな反抗が読み取れる、とする。

第三章

本章では、子供時代のナイーブな心を感性豊かに謳いあげた「ふうちゃん」「床屋」、ユーモアと機智に加え、ペース溢れる小さな日常を描いた「におい」「毛虫」の四篇を取り上げて、ありふれた日常の中で何気なく生きている小さな生命に激しい憐憫の情を感じている黄靈芝に注目し、「一生を顧みる時、ほぼ虐げられた一生だった」と回顧する黄自身が生きるよるべとしてきた心象の原風景を探った。

第四章 作品発表の場と言語との関係

黄靈芝には日本語で著した小説を自ら中文に訳して台湾の文芸誌に発表した時期（1969～1978）があった。本章では、『台湾文芸』に掲載された小説「蟹」を例に日文と中文の比較検討を行い、黄の中文能力は日本語にみられる洗練された感性に遠く及ばず、それが日本語のみの創作に落ち着くに至った主因であるとする。以上の事情もあって台湾における彼の評価は極めて低かったのに対し、逆に日本で彼の才能に注目しその日本語作品を掲載する雑誌や新聞がひそかに存在した。筆者（岡崎）は『七彩』『早苗』『燕巢』『岡山日報』『えとのす』など稀少な資料を掘り起こし、これまでほとんど知られていないそれらの事実を明らかにし、またその評価のあり方について言及した。

第五章 社会と人間を描く視点

本章は、「輿論」「天中殺」「『金』の家」「龍宮翁戎貝」の四篇を取り上げ、1950年代～70年代の台湾社会を見据えながら、不幸を自分で作り出している人間の滑稽さ、愚かさ、哀れさを描いた黄靈芝の手法を分析し、同時に戦後台湾における戒厳令下の権力社会の様相とそこに生きる台湾庶民の姿を描写した。

第六章 恋愛小説「紫陽花」の周辺

黄靈芝の数少ない恋愛小説の中に、なつかしい声の響きをテーマに隣家の忘れ得ぬ少女への思いを綴った「紫陽花」と題する作品がある。本章では、筆者（岡崎）自身が何度も台湾・大陸に足を運び、「紫陽花」のモデルとなった少女を追跡し、瞠目すべき事情を明らかにする。即ち、「紫陽花」の隣家の少女とは、14才で自伝的日文小説『漂浪の小羊』を戦後直後に台湾で発表した陳蕙貞であること、また、発表後ブームとなるや直ちに禁止されて五十数年間詳細不明だった幻の『漂浪の小羊』を見つけ出す。さらに二・二八事件後中国大陸へ渡った陳蕙貞一家の消息を探り、中国現代史の荒波の中で数奇な運命をたどって今に生きる陳真（かつてNHK「中国語講座」のゲスト講師）という女性にめぐりあう。台湾女流作家第一号の陳蕙貞（陳真）が最後の日文作家黄靈芝に与えた衝撃の大きさを掘り起こし、戦後台湾文芸史の未知の部分明らかにした。

第七章 人間像に迫る

本章では、視覚をテーマに恋愛を描いた「喫茶店『青い鳥』」及び110首の短歌からなる「墓の恋」の二篇から、黄霊芝の恋愛経験を探り当て、それらの苦い経験が彼の人間観や創作に与えた影響を考察した。また、生きることと格闘する庶民の姿を描いた小説「歯車」「豚」の二篇を通して、必死に努力はするがその結果はいわゆる成功とは対極となってしまう主人公像を分析し、黄霊芝自身の姿に酷似するとした。

終章 台湾文芸における黄霊芝の位置と今後の課題

本章では、日本語で創作し表現してきた黄霊芝を台湾文芸を担う作家とみなし、あらためて黄を台湾文芸史の中に位置づけることがきわめて重要である、と主張する。黄は戦後の台湾文学に通底する政治的イデオロギーを毛嫌いする点で、また創作言語がほとんど台湾人には読まれない日本語である点で異端ではあるが、描かれているのは台湾の社会であり、台湾の日常であり、台湾の庶民である。その意味で作家としての文芸性を正しく評価した上であらためて黄霊芝を台湾文芸史の中に位置づけることは、多言語によって表現される台湾文芸の多様性という広い視野をもつことになり、台湾文芸の未来を切り開くことにつながる。その意味で、台湾における複雑な言語状況の中で、他の忘れられた作家や作品をも見直して台湾文芸史を再構築することが今後の課題である、とする。

論文審査結果の要旨

学位審査会は、2002年2月6日、学内審査委員4名・招聘審査委員2名によって行なった。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、アジア・太平洋戦争終了後に禁止されたはずの日本語を駆使し、戒厳令の時代も含めこれまで五十数年間一貫して台湾で創作活動を続けている黄霊芝という知られざる作家とその作品を掘り起こし、それを基軸に戦後台湾の日本語文芸を当時の政治・社会状況の背景の中で捉えなおし、その文芸性を高く評価し、台湾文芸史に新たな価値を見いだした画期的業績であると評価できる。

台湾において「日本語で表記された台湾の文学」を論じる場合、戦前の日本統治時代の楊逵『新聞配達夫』、呂赫若『牛車』や龍瑛宗『パイヤのある街』といった作品に始まり、呉濁流によって戦後に出版された小説『アジヤの孤児』（1946；原題『胡志明』改め『胡太明』）で終るのが、いわばこれまでの定式であった。いずれも初出は日本国内であるが、この間、台湾では台湾人による日本語作品は数多く創作されたものの、それらは戦争終結後まもなく、とりわけ中国国民党による日本語禁止令（1946年10月）以降、その存立の基盤を失ってしまった。そして日本語による文芸も急速に衰滅したと思われていた。

本論文で取り扱った作品と作家は、その日本語禁止令の施行日に発表された陳蕙貞（＝陳真）の日本語小説『漂浪の子羊』を最初期として、それから今日もなお日本語によって

創作を続けている黄靈芝であり、邱永漢にも相当な紙幅が費やされている。これらの三人については、日本文学史の対象ではないし、作者のアイデンティティを台湾以外に求めようのない人々であるにもかかわらず、今日の台湾文学史からも完全に欠落した作家群像である。

本論文はこの黄靈芝とその作品を基軸にすえながら、陳蕙貞や邱永漢をも視野に入れつつ、これまでの台湾文学研究で見落とされてきたこれらの作家と作品を、多くの新資料に依拠しながら分析を加えたものであって、十数回にわたる台湾でのフィールドワークを含め、日本・台湾・中国において散逸した資料を精力的に収集し、『軍民導報』や『新新』『明台報』など貴重な資料の発掘を行なっている。

また、NHKの中国語講座でよく知られる陳真さんが陳蕙貞その人であって、その彼女が黄靈芝にとって幻の恋人であった『紫陽花』のヒロインであり、作品の発表当時は靈芝の隣人であったことを明らかにするドラマティックな結論は、おのずから戦後の中国・台湾史を皮膚感覚で感じさせる興味となっている。

本論文は、その日本語台湾文芸に対する論点の明確さや新資料の提示によって、きわめて説得的に台湾文芸事情と台湾社会が描写されている。また、全体として文章がきわめて格調高く、思わず引き込まれてしまう迫力に満ちている。この業績は台湾での6年間の留学期間を含む18年間の台湾文芸研究という一貫した調査・研究の基盤のもとに提示され、すでに公刊されている自著『台湾文学－異端の系譜』（田畑書店、1996）とあわせ、台湾文芸史の書きかえを促そうとする確固たる目標を納得させるものとなっている。加えて、本論文の示唆している興味深い点は、近代国家という概念のもとで国家と言語の一致は当然のことと認識されてきたなか、台湾語（閩南語）や客家語に加え、戦前の日本語、戦後の北京官話、そのほか歴史的に多様な言語事情を有する台湾において、多言語による文芸の可能性を期待する未来志向的視点である。

以上の積極的評価が審査の基本であるが、しかし、全く課題がないわけではない。例えば、文章表現にときおり混じる口語的用語が格調を損なう個所がある、という指摘のほかには、黄靈芝が日本人作家の影響をどの程度に受けているか、という点の言及があってもよかつたのではないか、日本語で書くことをやめていった作家との比較について更なる展開の余地があるのではないか、などである。しかし、委員共通の意見として、これまで知り得なかつた数多くの事実や台湾文芸に関する考え方を示唆され、学ぶことのきわめて多かつた業績であり、上記の問題点は今後のさらなる展開を期待するという意味であって、戦後台湾の日本語文芸の全体像を解明した研究成果は高く評価できる、ということであらためて確認した。

審査委員会は、以上により、本論文を学位論文として認定することについて、全員一致で合意した。